慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	特集 : ポール・サミュエルソン教授追悼特集
Sub Title	序文 Preface
Author	塩澤, 修平(Shiozawa, Shuhei)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2010
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.103, No.2 (2010. 7) ,p.221(1)- 223(3)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : ポール・サミュエルソン教授追悼特集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20100701-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」103 巻 2 号（2010 年 7 月）

特集：ポール・サミュエルソン教授追悼特集

サミュエルソン（P. A. Samuelson）教授は 20 世紀を代表する経済学者の一人であり，その「静学的ならびに動学的経済理論を発展させ，経済学における分析水準を著しく高めた科学的貢献」に対して 1970 年度ノーベル経済学賞が授与された。受賞直後の 1971 年には，慶應義塾大学で名誉学位を受け，三田山上で「アメリカ経済学の動向」という記念講演を行っている。直接薫陶を受けられた福岡正夫名誉教授をはじめとして，サミュエルソン教授は慶應義塾の経済学にも大きな影響を与えている。2009 年 12 月 13 日，惜しくも逝去されたが，慶應義塾経済学会では，その学恩に対し感謝の意を表明すると同時に，現代的な意義を検討することにより，学界にいささかなりとも貢献したく，『三田学会雑誌』での追悼号を企画した次第である。

サミュエルソン教授は，1915 年にアメリカ，インディアナ州ゲイリーで生まれた。1935 年にシカゴ大学を卒業してハーバード大学大学院に移り，ハンセン（A. H. Hansen: 1887–1975），シュンペーター（J. A. Schumpeter: 1883–1950），ハーバラー（G. Haberler: 1900–1995），チェンバレン（E. H. Chamberlin: 1899–1967）などに師事し，1936 年に修士号，1941 年に博士号を取得した。同年，デイヴィッド・A・ウェルズ賞を受賞した。1940 年からマサチューセッツ工科大学（MIT）の経済学教授となっている。1947 年に主著『経済分析の基礎』が出版され，またジョン・ベーツ・クラーク賞を受賞した。1948 年には長年にわたり多くの国の大学で教科書として使われ版を重ねた『経済学』の初版が出版された。1951 年にエコノメトリック・ソサエティー会長，1961 年にアメリカ経済学会会長を歴任している。そして前述のように，1970 年にノーベル賞を受賞した。

サミュエルソン教授の業績は経済学のほとんどすべての分野におよぶ膨大なものであり，限られた紙幅でその意義を語ることはもちろん困難であり，また本特集において福岡正夫名誉教授が論考されているが，あえて概観させていただく。

サミュエルソン教授の学問的特質の第一は，広い意味で論理実証主義に基づいているといえることである。科学的な理論は，条件さえ整えば経験的事実に即して反証できるものでなければならないという立場である。各経済主体の最大化行動，市場均衡の安定性の仮説に基づき，比較静学の枠組みにおいて，操作的に有意味な定理を導こうとするものである。

第二は新古典派総合と呼ばれる立場であり，価格理論に関しては伝統的な新古典派の考えを受け継ぎ，ケインズ経済学の貢献を摂取同化しようとするものである。財政政策や金融政策などの有効

需要促進政策によって完全雇用を達成しておけば，市場による需給調整機能を前提とした新古典派の経済理論が妥当するという考えである。

以下，サミュエルソン教授の貢献がその後の研究の嚆矢となった，あるいは既存の議論を著しく発展させることとなったいくつかの代表的主題について概要をみてみたい。

顕示選好の理論：顕示される選好関係に対して合理性の仮定を課すことにより，選好順序あるいは効用関数を仮定することなく，有意味な需要法則を導くものである。

動学的安定条件論：市場均衡の安定性とは，価格の調整過程が不均衡状態から出発して均衡に収束することをいう。価格の変化率と超過需要量とを比例させるような微分方程式体系として定式化し，動学的安定条件を求めたのである。

代替定理：産業連関表に関し，投入係数が技術的に可変であっても，一組の係数が選択されれば，ある条件の下では，最終需要の変化とは独立であることを明らかにしたものである。

ターンパイク定理：成長経路を考える場合，目標となる点が遠ければ，まず成長率最大の均衡成長経路に乗せ，それに沿って成長し，目標の近くでこの経路から離れるのがもっとも効率的であるという考え方である。

要素価格均等化の定理：国と国の間で生産要素の移動が不可能であっても，生産物が自由に移動できれば，ある条件の下で生産要素の価格は均等化することを示した。

公共財の理論：すべての消費者によって共同消費される公共財を含んだ経済のパレート効率の条件を導いた。すなわち，公共財と私的財との限界代替率のすべての消費者についての総和が，生産における限界変形率に等しくなるというもので，サミュエルソン条件と呼ばれている。この条件は市場機構では達成できず，実現のためには政策当局の介入が必要となる。

本特集において福岡正夫名誉教授は，サミュエルソン教授との思い出を語るとともに，教授の経済学の基本的立場をめぐり比較静学と対応原理，新古典派総合，反証主義哲学などにわたり所見を述べ，あわせて晩年の主要な功績についても概観している。

大山道広名誉教授は，国際経済理論の分野での教授の業績を解説し，顕示的選好理論に基づく貿易と厚生の諸問題の包括的分析，ヘクシャー・オリーン理論の拡張などの論考を行っている。

筆者は，重複世代モデルにおいて環境を公共財と捉え，サミュエルソン条件について検討している。

須田伸一教授は，顕示選好理論の発展をサミュエルソン教授がそのアイデアを得たとされる1936年からハウタッカーが効用関数の存在証明を行った1950年の時点まで辿っている。

川又邦雄名誉教授は，サミュエルソン教授の思い出とともに，いくつかの興味深いエピソードを紹介している。

宮尾尊弘筑波大学名誉教授は，MITの大学院生として，またサミュエルソン教授の研究助手として学んだことを，教授の人となりや「具体例から抽象理論へ」といった学問的な姿勢も含めて述べ

ている。

瀬古美喜教授は，MIT の大学院生として受けた教授の教えを，都市経済学との関連を踏まえて述べている。

塩 澤 修 平
（経済学部教授）